



2021.10.1 No.113(季刊)

編集 国立ハンセン病資料館
発行 公益財団法人笹川保健財団

目次

- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| P1 館長就任あいさつ | P3 資料紹介 その⑨ |
| P2 2021年秋のオンラインミュージアムトークについて | 『生き抜いた！ ハンセン病元患者の肖像と軌跡』 |
| P2 渋谷栄一とハンセン病問題についての講演会を開催 | P3 研究から 収蔵庫における資料の整理とその活用 |
| | P4 資料館の現場から その⑩ 広報の仕事 |
| | P4 お知らせ／利用案内 |

館長就任あいさつ

内田 博文

このたび、成田^{なりた}稔^{みのる}先生の名誉館長へのご就任に伴い、7月1日付けをもって、国立ハンセン病資料館の館長に就任させていただくことになりました。身に余る重責ではございますが、これまでハンセン病問題に多少関わらせていただきました経験を生かし、精一杯の努力をしまいる所存でございます。皆様方には、前館長と同様、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

1907年（明治40年）の法律「癩予防ニ関スル件」の制定以来、1996年（平成8年）の「らい予防法」の廃止まで実に90年近くにわたって強行された国の誤ったハンセン病強制隔離政策の下で、数々の人権侵害及び差別事象も枚挙に暇がないほどに発生しました。

ハンセン病差別・偏見は今も当事者の方々の「人間回復」にとって高い壁となっています。2001年5月11日の熊本地裁判決後もハンセン病差別・偏見に大きな変化は見られないとの「当事者の体感」は強いものがあります。

療養所入所者の少数化（2021年5月11日現在、全国13の在園者計1002人）及び高齢化（2021年5月11日時点で平均年齢87.3歳）はますます進んでいます。療養所を「終の棲家」とせざるを得ない、そして、死亡後、遺骨が療養所内の納骨堂に安置される方は今も少なくありません。

退所者の方も、この差別・偏見にさらされて今も生きておられます。2001年の熊本地裁判決の確定

等を受けて設置されたハンセン病問題検証会議の提言を受けて設置された再発防止検討会は、2016年11月に東京及び大阪に



において、全国退所者連絡会の役員から退所者調査に関するヒヤリングを実施しました。このヒヤリングでは、「沖縄県でも、500名余りの回復者が一般社会で生活していると言われていますが、…ほとんどの回復者は身を沈めてひっそりと隠れて生活しているのが実態です」などの厳しい実態が紹介されています。このヒヤリングでは、沖縄県在住の退所者の半数が「今後は療養所に再入所することを検討している」とのショッキングな話も紹介されました。

ご家族の実態も、退所者の方のそれに近いものがあると推察されます。補償金を請求するかどうか、ご家族の葛藤は想像を超えるものがあります。請求は多くても3割にとどまるのではないかともいわれています。

2007年（平成19年）4月に国立ハンセン病資料館として再開館して以来、14年余りが経過しました。当資料館が果たすべき役割の重要性を改めて噛み締める次第です。

最後に、重ねて、よろしくお願い申し上げます。館長就任のご挨拶のまとめとさせていただきます。

2021年秋のオンライン ミュージアムトークについて

国立ハンセン病資料館が実施している連続セミナー「オンラインミュージアムトーク」は昨年に続き本年も新型コロナウイルス感染症対策の影響により、定員100名の事前受付制、Zoomウェビナー形式にて実施し、多くの方にご参加いただいています。

本企画は当館の学芸員に留まらず、他園の歴史館、社会交流館等の学芸員を講師にお招きしています。

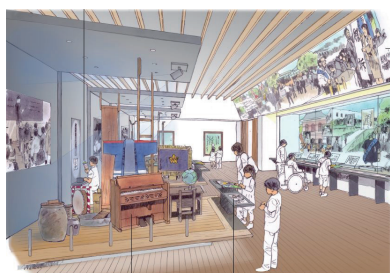
去る9月25日には菊池恵楓園社会交流館（歴史資料館）学芸員はらだ かずまさの原田寿真氏による『「教えられる」場から「考える」場へー国立療養所菊池恵楓園に設置される歴史資料館の目指すべきものー』をテーマとした講義をお届けしました。

冒頭で菊池恵楓園とハンセン病問題に関するガイダンス映像（約20分）を上映した後、恵楓園における資料保存や歴史資料館運営についての紹介、2022年リニューアルオープン予定の新館の準備など、現場の試行錯誤の様子について解説していただきました。また講師から、ハンセン病問題の解決に向けて、教えられるのではなく、自ら考え変わっていくための取り組みが重要との指摘もなされました。

今回は10月23日に復生記念館学芸員もりしたひろこの森下裕子氏をお招きし、静岡県にある現在は唯一の私立療養所として歩んできた神山復生病院の活動についてお話しする「神山復生病院の歩み」を開催いたします。

また11月27日には当館学芸員はしもとあやかの橋本彩香による「国立ハンセン病資料館収蔵庫ツアー・資料管理の現場から」をお届けいたします。

このように様々な切り口でハンセン病問題にアプローチする本企画は、多角的にハンセン病問題の理解を深める機会でもあります。引き続き皆さまのご参加をお待ちしています。（吉國元）



「菊池恵楓園歴史資料館」の完成予想図

渋沢栄一とハンセン病問題に ついての講演会を開催



2021年8月21日（土）14時からすぎやまひろあき杉山博昭氏（ノートルダム清心女子大学教授）講演会「しぶさわえいいち渋沢栄一の生涯とハンセン病ーその事績と功罪をめぐってー」を開催しました。岡山県の杉山氏とZoomで接続し、資料館からYouTubeライブ配信の形で実施しました。

渋沢は実業家として著名な人物で、近年では新一万円札のデザインや、NHK大河ドラマ「青天を衝け」などの影響でさらに関心が高まっていますが、社会福祉やハンセン病問題に深いかかわりがあったことは必ずしも広く知られているわけではありません。

杉山氏は講演で、渋沢の少年期のハンセン病患者との関わりまでさかのぼり、明治時代になって渋沢が院長を務めた東京の養育院でのハンセン病問題との本格的な出会い、そしてみつ だ けんすけ光田健輔との邂逅と生涯にわたる強い結びつき、さらには「癩予防二関スル件」制定をはじめとした隔離政策に果たした役割と責任などについて分かりやすく説明してくださいました。そのうえで、隔離政策についての責任は全て国にあるとしたり、あるいは隔離政策の責任を過度に渋沢に求めたりするのではなく、政府の人間ではないもののそこに極めて近く社会的影響力の強かった渋沢の立ち位置をふまえ、事実にもとづいた評価を行う必要があると指摘されました。

講演会の動画は、資料館のYouTubeチャンネルでご覧いただけます。（下記QRコード）

（大高俊一郎）



資料紹介 その⑨

『生き抜いた！ ハンセン病元患者の肖像と軌跡』

2021年は、「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟の原告勝訴から20年の節目の年です。今回ご紹介する資料は、2003年に草風館より刊行された『生き抜いた！ ハンセン病元患者の肖像と軌跡』(著・高^{たか}波^{なみ}淳)です。

本書を手にとってまず目につくのは、収録されている写真の豊富さ。前半部分では、厚労省前でのビラ配りや療養所での現地取材、国の控訴断念を受けて会見する原告らの様子が、インパクトのあるカラー写真で鮮明に収録されています。鬼気迫るものも多いですが、中には支援者や弁護士、そしてハンセン病回復者の方々が笑顔で祝杯を挙げている場面もあります。数々の写真のあとには、著者である高波淳記者の目から見た、国賠訴訟の一局面を知ることができます。

後半部分には、ハンセン病回復者の方々の写真とエピソードが多数収録されています。どんな人生を送って、どんな思いで尊厳回復の時を迎えたのか。あるいは、裁判の後に何を思うのか。国による強制隔離のもとで、人権や人としての尊厳を奪われながらも闘い続けたハンセン病回復者の歴史。ここに収録されているのはその過酷な人生のほんの一部ですが、回復者の方々が抱えてきた苦悩と悲嘆を理解するための一助となることでしょう。

国賠訴訟は、ハンセン病問題の歴史の中で非常に大きな意義を持っています。しかしながら、それはハンセン病問題の終焉ではありません。20年前のことだからと「いまさら」と思わず、「いまから」そして「これから」と繋げて考えていくための第一歩として、本書は十分に役立ってくれることでしょう。

(斉藤聖)



『生き抜いた！ ハンセン病元患者の肖像と軌跡』(草風館)

研究から

収蔵庫における資料の整理とその活用



収蔵している義足や自助具

当館では、ハンセン病問題に関する資料を数多く収蔵しています。資料の種類は文書や写真など多岐にわたり、それぞれの材質や状態に合わせて温度や湿度などの保存環境を整え、後世の人びとにつなげる取り組みをしています。

数多く収蔵している資料のひとつが、療養所の入所者の方々が使っていた義足や自助具です。ハンセン病の後遺症などによる身体の欠損や失われた身体機能を補うために、はじめは入所者の手で、のちに療養所の職員や義肢装具士によってつくられました。

すべて使う人の後遺症や趣向に合わせたオーダーメイドでひとつとして同じものはありません。どのような後遺症を患った方が使っていたのかということや工夫されている点などについて、療養所の義肢装具士さんに聞き取りをすることもあります。

このような形で得られた知見は、収蔵庫内での所在地などとともに、資料データベースとよばれるシステムに蓄積し、いつでも活用ができるようにしています。これにより、企画展での展示や館外への貸し出しなどがスムーズに行われ、さまざまな場面でハンセン病問題の普及啓発に役立てられます。

11月27日(土)のミュージアムトークでは、「国立ハンセン病資料館収蔵庫ツアー・資料管理の現場から」と題して、資料の保存管理に関することや、当館の常設展示室には出ていない収蔵資料を紹介いたします。当館HPより事前申込のうえぜひご参加ください。

(橋本彩香)

資料館の現場から その⑬

広報の仕事

当資料館の広報業務は、メディア各社に向けたプレスリリースの発信、メディアからの問い合わせ対応から、公式ホームページにおける情報発信、公式Facebook・Twitter・YouTubeチャンネル等SNSにおける発信、またこの資料館だよりの発行など、多岐にわたります。

広報業務は社会と当資料館をつなぐ仕事だという認識のもと、より多くの方にハンセン病の正しい歴史について知っていただき、ハンセン病問題への関心を持っていただけるきっかけとなるよう、「伝わる方法」を日々模索しております。

このコロナ禍、当資料館も三密回避のため定員制を設けざるを得ず、限られた入場人数における開館状況が続いておりますが、この状況に対応するため、インターネットを活用したプログラムが進められています。団体向けオンライン展示解説、オンラインミュージアムトーク、リモート講演等がその例ですが、これらの取り組みは、今まで遠方で当資料館に足を運べなかった方や、家庭の事情で講演会の参加が難しかった方々などに当資料館に触れていただけるきっかけとなっています。さらにより多くの方に新しい当資料館の取り組みを知っていただけるよう、当資料館の露出をいかに増やしていけるか、日々悩みながら対応しています。

あるハンセン病回復者の方から「もっと多くの若い人に関心をもってもらい、知ってほしい」という要望をいただいております。若い世代の方に興味を持っていただけるよう、その広報手法について、引き続き考えていきたいと思っています。

(及川由紀子)



国立ハンセン病資料館YouTubeチャンネル

お知らせ

■ホームページをリニューアルしました

このたび、当館ホームページをリニューアルいたしました。トップページよりワンクリックでスムーズに目的の情報にアクセスいただけるよう工夫いたしました。また、日本国外への情報発信を推進するため、アラビア語、中国語、英語、フランス語、ロシア語、スペイン語でもご覧いただけるよう多言語対応を施しました。より使いやすくなりましたホームページをぜひご覧ください。今後とも、わかりやすい情報発信に努めてまいります。

<https://www.nhdm.jp/>

■第43回ハンセン病医学夏期大学講座中止について

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、予定しておりました第43回ハンセン病医学夏期大学講座は今年度開催中止となりました。

利用案内

新型コロナウイルス感染拡大防止をはかるため、入館制限や予約制の導入などを行っています。詳しくは当館公式ホームページをご覧ください。

■開館時間 10:00～11:30
13:30～15:00

■休館日 毎週月曜日（祝日の場合は開館）
年末年始、国民の祝日の翌日、
館内整理日

■入館 無料（要事前予約）

■交通

- ・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「ハンセン病資料館」下車）
- ・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
（「ハンセン病資料館」下車）
- ・JR武蔵野線 新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「全生園前」下車、徒歩10分）
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981
URL <http://www.hansen-dis.jp>